

映像を用いた博物館資料情報の再収集：基幹研究 ：北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメン テーションと共有

著者	伊藤 敦規
雑誌名	民博通信
巻	160
ページ	14-15
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00009033

基幹研究 ● 北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有 (2014-2017年度)

国立民族学博物館(以下、民博)は、2014年にフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトという研究活動を開始した。本誌でもたびたび紹介しているように、開発型(4年度)および強化型(2年度)の合計14件のプロジェクトが始動済みで、すでに一部は研究期間が終了している。各プロジェクトは個別に目的を設定してきたものの、全体を貫通する射程を簡潔にいうなら以下ようになる。すなわち、研究者と博物館とソースコミュニティの人々(博物館資料の制作者、使用者、その子孫)とが国際共同研究という枠組みにおいてチームを組みながら、収集資料の高度情報化(資料情報の再収集や公開適正化作業)と資料利用に関する協働環境(情報生成型データベース)を整備していく学術的かつ実践的な試みである。筆者は開発型プロジェクトの代表を2014年6月から2018年3月まで務めている。本稿では、その実施内容を振り返りながら、とくに資料の高度情報化の手法にかんして、映像によるドキュメンテーションの可能性と有効性を紹介したい。

プロジェクトの視座

本プロジェクト「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」では、日米英の14の博物館と個人蔵の合計約2,200点の資料を対象とした。この場合のソースコミュニティは米国南西部先住民ホビの人々(人口は約1万2,000人)で、これまで22名が資料熟覧に参加した。

資料熟覧とは、博物館資料に関する調査手法のことである。展示品の単なる閲覧ではなく、モノ、資料台帳の記載内容、熟覧者個人の経験や記憶を照合しながら、一点一点について地元の文化的文脈に沿った解説をしてもらった。主な話題は、使用した思い出、制作上の注意点、材料調達の仕方、デザインの解釈、地元での呼称、制作者やその遺族、コミュニティの今昔などであった。資料台帳の記載内容の誤記を訂正したり、他機関収集資料との関連にも話題が及んだ。



熟覧に参加したソースコミュニティの人々

資料熟覧には2つのアプローチがあった。まず、ソースコミュニティの人々を各地の博物館に招聘・派遣し、実物をハンドリングするやり方である(直接熟覧)。ただし、限られた予算、地元の儀礼や農作業の繁忙期と

いった時期的制約、健康状態などによって、招聘や派遣が困難なこともあった。その場合には、筆者が資料を収集する博物館に出かけ、その資料を写真撮影した。そして後日地元を訪問し、集会所や工房にモニターを設置して、デジタル画像を用いて熟覧を行った(間接熟覧)。2機関については、収蔵品を紹介するウェブサイトに掲載された資料画像を用いて間接熟覧を実施した。

2つの違いは、熟覧者による触察機会の有無となる。間接熟覧の場合は、デジタル技術を活用するためにモニター上での拡大等の操作が容易にでき、対象資料の寸法が小さい場合でも熟覧者の視線を追いやすいというメリットもあった。しかしそれでも大概のソースコミュニティの人々は、接触行為が文化的に忌避される副葬品などの資料を除き、直接熟覧を望んだ。画像データを次のものに移す指示や拡大の指示をオペレーターに出す手間を省けたことに加え、触察によって質感や重量を確認したり、嗅覚や聴覚などを駆使しながら資料の存在をより直感的に理解することができるためである。

「再会」を記録する

民族学博物館を舞台としたソースコミュニティとの交流方法として、資料を介した意見交換は特段目新しいものではない。展示会の計画途上での資料選定や図面確認のための意見交換や

情報共有は頻繁に行われてきた。また米国では1990年制定の連邦法「米国先住民墓地保護・返還法」を根拠とした人骨、副葬品、聖物資料の返還交渉のための招聘が、この四半世紀で一般化している。

ソースコミュニティと資料との「再会」を作品制作に結びつける制度も存在する。欧米の博物館や美術館にしばしばみられるアーティスト・イン・レジデンスというプログラムでは、(先住民の)アーティストなどを短期・長期間にわたって受入れ、資料熟覧や創作環境を提供する。米国ニューメキシコ州サンタフェの先端研究所やオランダ国立民族学博物館などが長年にわたって運用していて、資料収集(寄贈)のプロセスに位置づけたり、展示会企画の草案に組み

機関名	熟覧形態	点数	実施年月
国立民族学博物館	直接	281点	2014年10月、2015年4月
	直接	184点	2015年4月、11月
野外民族博物館リトルワールド	直接	99点	2015年11月
天理大学附属天理参考館	直接	24点	2015年11月
松永はさきの資料館	直接	324点	2016年4月、10月
個人蔵	間接	537点	2015年11月、2017年6月
北アリゾナ博物館	直接・一部間接	439点	2015年7月、12月
	直接・一部間接	9点	2017年10月
デンバー美術館	間接	34点	2017年1月
デンバー自然科学博物館	間接	45点	2017年1月
コロラド州歴史協会	間接	17点	2017年1月
国立アメリカンインディアン博物館	間接	150点	2017年5月、6月
国立スコットランド博物館	間接(ウェブサイト)	1点	2017年6月
ポートランド美術館	間接(ウェブサイト)	1点	2017年6月
ニューメキシコ州立大学附属博物館	直接	15点	2017年8月
ジェロニモ・スプリングス博物館	直接	22点	2017年9月
国立自然史博物館	直接	26点	2017年12月
合計	14機関+個人蔵	2,208点	合計 約80日間

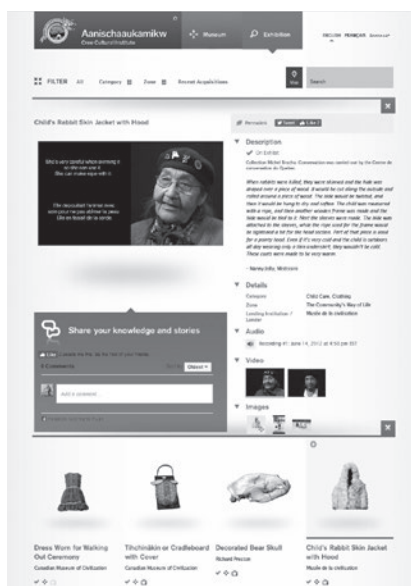
本プロジェクトでの資料熟覧の実施機関と概略

込むこともあるようだ。公益社団法人北海道アイヌ協会からの依頼で民博が受入を行っているアイヌ工芸者技術研修(道外研修)も、その1つといえるだろう。

こうした交流の記録を資料データベースに加筆している機関もある。たとえば米国ワシントン州シアトルのパーク博物館および併設するビル・ホーム・センターは、熟覧年月日、熟覧者氏名、熟覧者による見解などを文字情報として入力している。ところが残念ながら、「再会」の記録を一切残していない機関も多い。筆者は、ソースコミュニティの人々と博物館資料との千載一遇の「再会」の機会を、メモやスナップ写真程度で済ませがちな博物館側の対応には改良の余地があると常々感じていた。そこで本プロジェクトでは、資料熟覧の様子をビデオカメラで収録することにした。

映像によるドキュメンテーションは、熟覧者の子孫や遠隔地居住者といった、時空間の隔たりによって熟覧現場に同席できない人々が、後日追体験するための配慮でもある。同時に、熟覧者が実施後にソースコミュニティの人々から「秘匿性の高い宗教的知識(ホビでは重要なカルチャル・センシティビティの1つと考えられている)を部外者(博物館)に口外した」などといった疑惑を抱かれないように、どの資料について何を語ったのか(語らなかったのか)を物的証拠として提示できるような、ある種リスク回避のための保障として利用することも念頭に置いた。つまり、受入機関にとっての単なる事業の記録ではなく、これまでにない資料情報収集や情報提示の手法として、ソースコミュニティと博物館双方にとっての意義や有効性を探ったのである。

さらに、「再会」を動画収録するアイデアは、先行研究や先行事例を知ることでより魅力的に思えるようになった。米国の人類学者アン・フィエナップ＝リオードンは、アラスカ先住民ユピックの古老をベルリン民族学博物館に派遣し、そこで資料熟覧を行った。古老は若い頃に使用した道具類の使い方を身振りとともに生き生きと解説し、その道具を使用する時に口ずさむ歌も披露したという(Fienup-Riordan 2005)。本プロジェクトでも身振りや歌といったテキストというデータ形式には収斂されない「再会」が眼前で起こるかも知れないという期待があって、聴覚や視覚に訴えかける資料ドキュメンテーションの手法を具体的に考えるようになった。



実際に、カナダのクリー文化協会が公開しているウェブサイトでは、地元の古老が資料解説する動画がすでに公開されている。残念ながら、全132点の公開中の資料の中で、映像による語りが含まれているのは51点と半数に満たない。しかも動画の中には対象資料が登場しない。対象となった資料はカナダ歴史博物館など

クリー文化協会のウェブサイト
(exhibit.creeculturalinstitute.ca/collection/ 2017年11月7日確認)。

の他機関が収蔵しているためである。それでも、土着の言語、会話のテンポや抑揚、さらには話者の豊かな表情とともに資料が紹介されている。その様子は、従来主流を占めてきた単語レベルの記述と資料画像の組み合わせによる資料情報の提示に比べ、格段にリアリティがあり、それでいてどこか懐かしく、人間味のある、独創的で効果的な表現方法に感じられた。クリー文化協会以外にも世界の民族学博物館が公開している資料データベースのインターフェースの動向を調べたことで、本プロジェクトでの動画撮影について確信を持って実施することができた。

映像記録のインパクト

2014年10月の初回の資料熟覧から約3年間でのべ80日間ほどを費やし、約2,200点の資料について、ソースコミュニティの熟覧者による個性豊かな「語り」を映像に収めてきた。ソースコミュニティの人々といっても、もちろん一枚岩ではなく、性別や出身村落やクラン、年齢、都市・保留地という育った環境、土着言語の習得度合い、儀礼参加の頻度などによって、そのモノに対する知識、経験には多様性がみられる。さらに、発言にユーモアを組み込んだり、詩的に語ったり、身振りを加えたり、抑揚を付けて語ることもあった。収録時間640時間という膨大な映像記録は、実在する博物館資料に関する貴重な補足資料(二次資料)としての価値だけではなく、2010年代におけるソースコミュニティによる多様な解釈の記録の集合という意味で、それ自体が貴重な民族誌的映像記録(一次資料)群を形成しているといってもいいかも知れない。

本プロジェクトでは、収蔵資料の触察や資料撮影の機会を提供してくれた連携機関には、その返礼として動画データを無償で共有することにしている。さらに、映像データに収められた語りはすべて文字起こしをし、ソースコミュニティの熟覧者とともに全収録映像を再生しながら内容を確認し(協働編集作業)、カルチャル・センシティビティへの配慮が必要な箇所は編集・加工してきた。そうした公開適正化作業を経たデータも連携機関に提供する予定である。すべての連携機関は資料の文化的生命力の回復(リアニメイト)のためのソースコミュニティによる資料の積極的活用を望みながらも、予算措置や人的配置が困難なために実現の見通しが立たない状況を憂えていた。そのため直接・間接熟覧を介した資料情報の再収集の研究企画について、高い関心を示してくれた。美術(館)における、ある作家の総作品目録、展示会記録、批評家による解釈などをまとめた「カタログ・レゾネ(Catalogue raisonné)」という情報生成型のデータベースは民族学博物館には存在しない。今回の「再会」およびその映像記録は、その不在を補うもの、もしくはそれ以上のインパクトをもつものとして期待されている。

【参考文献】

Fienup-Riordan, Ann. 2005 *Yup'ik Elders at the Ethnologisches Museum Berlin*, Seattle: University of Washington Press.

いとう あつり

国立民族学博物館学術資源開発センター准教授。専門は米国南西部先住民研究。編著に『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧—ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』(国立民族学博物館調査報告SER140)(2017年)、監修したデータベースに『RECONNECTING Source Communities with Museum Collections(<http://ifm.minpaku.ac.jp/hopi/>)』(2018公開予定)など。